

「原爆を許すまじ」と東京南部

—50年代サークル運動の「ピーク」をめぐるレポート

道場 親信

はじめに

本報告では、東京南部で「原爆を許すまじ」の歌が生まれた背景、運動状況とこの歌の普及過程を明らかにするとともに、そこで見えてきたサークル運動上の特徴が広島の代表的なサークル運動「われらのうたの会」にも見られることに触れ、「うた」に牽引されたサークル運動の頂点の時代、一九五四・五年について考えてみたい。

なお、ここでいう「東京南部」とは、戦前期の労働運動から慣用されているブロック概念であり、大田区・品川区・港区、それに目黒区を含んだ地域を指す。また、東京湾岸に広がるいわゆる「京浜工業地帯」の東京側であり、大工場も多数存在するが無数の中小工場が密集した地域でもある。

一九五〇年代において、東京南部はサークル運動の盛んであることにおいて全国有数の地域であった^①。中でも「下丸子文化集団（のち南部文化集団、南部文学集団と改称）」の活動はサークル詩の世界で全国的にもしばしば注目されたばかりでなく、本報告で取り上げる「原爆を許すまじ」の歌を生み出した点においても重

要な足跡を残した集団であった。

一、東京南部と作詩作曲運動の始まり

1. 一九五三・四年ごろの南部文化集団

下丸子文化集団は一九五一年春、安部公房・勅使河原宏・桂川寛の三人の若きアヴァンギャルディストが労働者の町・下丸子に入り、スケッチ指導や文学の勉強会などを通じた「文化オルグ」の活動によって生み出されたグループである^②。朝鮮戦争下、レッドパージと反戦平和運動の弾圧の中で生まれた同集団は、「半非合法」の活動を担うグループとして朝鮮戦争休戦までの軌跡を描いていった。「半非合法」というのは、彼らが発行した『詩集 下丸子』（全四集、一九五一年七月～五三年五月）にはアメリカの占領や朝鮮戦争に対する「抵抗詩」が含まれ、日常活動としても反戦ピラを夜間に電柱に貼るなどの「非合法」活動に携わっていたからであった^③。その間、文化集団では一九五二年にリーダーシップの交代が起きていた。集団発足当初のリーダーであった高橋元弘が一連の激化事件の中でレッドパージに遭った活動家を党が突撃的任務に投入することに嫌気がさして、党ばかりでなく集団をも離脱、生活の糧を求めて求職活動に力を入れざるを得ない他の三〇代のメンバーの足も次第に遠のいて、集団の再建は当時二〇歳になるかならぬかという年齢であった詩人・江島寛とその同年代の仲間たちの肩にかかったのであった。

五二年秋から集団のあり方について内部で議論を重ねた彼らは、五三年夏、ちょうど朝鮮戦争の休戦と重なる時期に新たな活

動に踏み出していた。彼らは『詩集 下丸子』に代わる新たな機関紙『下丸子通信』を発行する⁽⁴⁾。『下丸子通信』はこれまでの『詩集 下丸子』がB6版で三〇〜八〇ページであったのに対し、B4版で6ページ、薄くなった分月刊で刊行を続けるというフットワークの軽さを求めている。

形態の変化は運動方針の変化に対応していた。それ以前、「下丸子」という地名は一九四九・五〇年の東京南部における反レッドパージ闘争を象徴するものであった。南部には「PD工場」と呼ばれる米軍管理下の軍需工場が多数存在し、厳しい身体検査や労務管理が日常的に行われていた。レッドパージの波は南部の工場群も襲ったが、労働組合は横断的にこれに抵抗する「実力入門闘争」などによって首切りに抵抗しようとしていた⁽⁵⁾。こうした米軍管理と占領体制強化のためのレッドパージへの抵抗は、一九五〇年以降「民族独立」の闘いとして意味づけられ、共産党の影響下にある労働運動・政治運動・文化運動にとつて共通の象徴的地名となっていたのだ。現実に、下丸子では朝鮮の戦場に送られ破損した戦車を修理したり軍関係の物資を生産する工場に対してサボタージュの呼びかけなどがなされ、労働運動・民族独立の政治運動・反戦平和運動の課題が可視的に重層していた。

この象徴性は朝鮮戦争の休戦（一九五三年七月）とともに急速に後退する。すでに前年の四月には占領が終結し、まがりなりにも日本国は主権を回復していた。朝鮮休戦とともに「特需」は終わりを告げ、景気後退が訪れるが、戦争を通じて日本社会は「戦後復興」の足場を確かにしていた。「下丸子」にこたわってきた文化集団の運動は、新たな展開を必要とする状況に直面していた

のである。

そこで江島たち文化集団は、次のような方針を立てた。第一に、自分たちの活動の場を「下丸子」という局地から「南部」という広域に設定し直した。このことは、朝鮮戦争下で「民族解放東京南部文学戦線」を名乗り非合法詩誌『石ツブテ』（一九五二年二月〜一月）の発行に関わったメンバーが、「南部」という広がりにも触れたことも背景をなしていると考えられるが、それ以上に「戦時」体制が終焉していく中で「半非合法」性を失っていくことに伴い、より大衆的な運動基盤と横のネットワークを目指したがゆえのものと考えられる。

それゆえ第二の特徴として、サークル協議会（懇談会）の組織化が目標とされていく。南部に存在する職場／地域サークルに連絡をつけ、定期的に懇談会を開いて相互交流を進めていくのである。第三に、これとの関連で文化集団のメンバーは地域サークルに加入したり、新たにサークルを結成していくなどの活動に積極的に取り組んでいった。サークル懇談会を文化集団が呼びかけるという「外側」からの接続に加え、サークルに加入あるいは新規結成し「内側」から接続をしていくという二重の戦略がこの時期採られていった。

この方向性を追求するためか、下丸子文化集団は一九五三年一月に「南部文化集団」と名前を変え、機関紙も『南部文学通信』と改称される。『文学通信』はだんだんとページを厚くしていったが、その内容・性格は、地域展開した多様な活動の集約点としての意味をもっていた。具体的にはサークル懇談会を通してつながっていた単位サークルの機関誌からすぐれた作品や運動の指

針となる文章を転載しながら、「南部」における活動総体の活性化を展望するという位置づけであったと思われるが、やがて五四年八月に江島が病死すると、集団自体の求心力が希薄になりオリジナリティのある議論が出せなくなつて、南部サークル誌のダイジェスト誌的なものへと変容していった。文化集団が「うた」を作る運動と出会っていくのは一九五四年、江島存命の時期である。やがてそこから「原爆を許すまじ」が生まれることになった。

2. 音楽センターと「うたう詩」運動

この、サークルにおいて「うた」を作る運動は、「うたごえ」運動の中で呼びかけられたものである。東京南部における「うた」の運動が始まっていくまでのうたごえ運動の流れを概観しておく⁶⁾。

うたごえ運動の出発点にあるのは、一九四八年一月に発足した青年共産同盟（青共）コーラス隊である。青年共産同盟は共産党傘下の青年組織で、この青共コーラス隊は翌月には中央合唱団と改称される。中央合唱団の発足により、のちのうたごえ運動の基軸組織が生まれたことになる。同じ年の七月には中央音楽院が発足して合唱団員の教育機関が整備され、『青年歌集』の第一集が発行され（九月）、活動家を派遣しての「みんなうたう会」運動が開始される（十一月）など、運動のインフラが整っていくのがこの年である。合唱団は四八、四九年と東京都内に「みんなうたう会」を組織し、また日本各地での公演活動を通じて同様の合唱団の誕生をうながしていった。一九五一年七月にはうたごえ運動の拠点として「音楽センター」が落成している。

この間、合唱サークルばかりでなく、各地の労働争議や反戦平和運動で歌われたこの時期を代表する歌が生まれている。「民族独立行動隊の歌」である。一九五〇年一月、国鉄のレッドパージに抗議して東京南部・大井工場（品川区）の労働者、山岸一章が煙突に昇つた際、空中で彼が書いた詩に一晚で作曲をしてできたのがこの歌であった。作曲したのは中央合唱団の岡田和夫である⁷⁾。この歌が生まれた段階では、またうたごえ運動は本格的に始動してはいなかった。五二年には、下丸子文化集団と連携して『京浜文学新聞』を発行し、南部地域の文化サークル・労働組合を横へつなく「工作者」の役割を果たしていた入江光太郎が「血のメーデー」事件で逮捕された際、獄中で作詩し間宮芳生が作曲した「民族解放の歌」が生まれている。これらは闘争の中から生まれ、反米ナショナリズムを基調とした点で共通しているが、このころ（五〇〜五二年）中央合唱団の運動スローガンは「愛国、愛郷、平和」であったというから、四全協・五全協における共産党の「民族解放民主革命」と運動しつつ、左派ナショナリズムが文化一政治運動の多分野において開花した時期を凝縮した歌として親しまれていった⁸⁾。

こうした歌の普及、歌う活動の拡大とともに運動が本格的に拡大していくのは一九五三年からである。「東京のうたごえ」「京浜のうたごえ」「関東のうたごえ」など地域における「うたごえ」集会が始まり、運動は大きく高揚する。また、一月には第一回「日本のうたごえ」全国祭典を開催するなど、ローカルセンターとナショナルセンターを含んだ運動の集約点が整備されることで、個々の職場・地域サークルを動員し結び合わせていく回路が

成立した。

この「うたごえ」の運動は、先にも見たように出発当初からただ「歌う」だけでなく、歌を作る運動を重要な柱としていた。その基軸となるのは中央合唱団の研究生制度であるが、さらにオーブンな形で作曲講座を開き、歌を作る運動を大衆化していく。音楽センター作曲講座「みんなつくる会」は二次にわたって開催されているが、第一次は一九五二年一月五日から二月四日まで四回開かれた短期講座であり、これが好評であったため、第二次「みんなうたう会」として五三年二月から九月にかけての約半年間の長期講座が構えられた。ここからは多数の活動家が生まれ、運動体が生み出されていった。

これらの実績の上に、うたごえ運動の指導者関鑑子が「詩に音楽の翼を」と題した論文で「うたう詩」を呼びかけたのは一九五四年一月の『詩運動』第七号誌上においてであった。『詩運動』誌は赤木健介を中心とした人民文学詩委員会が創刊したガリ版刷りの雑誌で、全国詩活動者会議を呼びかけたり、その主な活動家を「全国編集委員」として全国的な詩運動のセンター作りを進めていた雑誌であったが、ここに「うたごえ」側から提携の呼びかけがあったと解することができる。歌は歌・詩は詩、ではなく、詩人の皆さん、歌える詩を作ってください、というのがその主な内容であった。

後述するように、音楽センターが原水爆禁止の創作歌を募集するのは一九五四年の六月、これに応えて作られたのが「原爆を許すまじ」であった。この歌の成功は「うたう詩」運動とともにうたごえ運動全体を押し上げる力にもなった。東京南部では「作詩

作曲の会」が発足して地域で創作歌の運動を進めていくし、一九五六年五月には音楽センターにおいて「うたう詩講座」が開催され、これに参加した人々によって「うたごえ作詩集団」が生まれる。同集団は「作詩と作曲の会」に改称し、機関誌『作詩と作曲』を発行していくが、こうした一連の運動展開の出発点に、先に見た関の論文があったのである。

3. 「うたう詩」制作と江島寛

この関鑑子の呼びかけに応えて南部文化集団で最初に——東京南部でも早い時期と推測される——「うたう詩」を作ったのが江島寛であった。江島は「煙突の下で」という歌を作詩し、これに木下航二が作曲をした。これは初期の南部のうたごえ運動の中では非常によく歌われた歌のようである。この歌に関し、『南部文学通信』第八号（一九五四年五月）には、作詩者と作曲者の往復書簡が掲載されている。木下は「私中央合唱団の作曲班にはいつています。一年前から歌を作ることを始めた新米です」と自己紹介をしている。木下は都立日比谷高校の社会科教師で、中央合唱団の第一四期研究生として作曲を学んでいた。彼はのちに「原爆を許すまじ」や「しあわせの歌」（石原健治作詩）など、数々の作曲をしていくことになる。他方、江島は「詩と音楽を同時にいかす発想の場というものはなかなか容易にはつくれないものだと思います。「うたう詩をなぜかかないのか」という非難と注文を僕はうけていますが、これを口火に集団の運動にしてゆくつもりです。「かく」運動、「うたう」運動の成果を地域で職場で結実させてゆくために、これからも一しよにやっつて行きたいと思っています」

と述べ、これ以降の南部文化集団での取り組みを示唆しつつ、「かく」と「うたう」という二つの運動の接合の難しさについて言及している。⁹⁾

この歌は、五月二六日の音楽センター第五回定期演奏会で発表されたが、間もなく江島は紫斑病に倒れ入院してしまう。彼が亡くなったのは八月一九日のことである。「集団の運動にしてゆくつもり」という彼の狙いもあり、江島はそれ以前に集団の同僚で高校時代からの仲間である浅田石二に木下を紹介していた。木下はそのころ品川区で活動していた若竹青年会の合唱部門「わかたけコーラス」の歌唱指導をしており、浅田は江島の示唆もあつてこのグループの中で活動を始めていた。浅田と木下の合作による「原爆を許すまじ」は、このわかたけコーラスを接点として生まれていくのである。

奇しくも「原爆を許すまじ」は江島が闘病する中で作られ、彼が亡くなるのと前後して普及していった歌であるが、この歌の成功を受けて東京南部では「うたう詩」制作の運動は本格化していくことになる。当然並行して「うたごえ」の運動も活発化していった。この点は全国の動向と軌を一にしているといえるし、東京南部の動向はむしろ音楽センターの動きと結びついて全国の動向を先取りする牽引力を持った動きであつたともいえる。

二、「原爆を許すまじ」と原水爆禁止運動

1. 創作歌の募集

以上のような背景をふまえた上で、「原爆を許すまじ」が生ま

れていく過程とその普及の過程を見ていくことにしたい。

先にふれたように、音楽センターが原水爆禁止の創作歌を募集したのは一九五四年の六月のことであつた。センター発行の機関誌『音楽運動』第三号（一九五四年五月二五日）で関鑑子が呼びかけたものである。すでにこの年の一月に関は「うたう詩」の創作を呼びかけていたが、同年の三月に発覚したビキニ水爆実験における被曝事件以後の原水爆禁止署名運動の盛り上がり¹⁰⁾を受けて、このテーマでの創作歌を提起したのである。

先行する国民的大衆運動と「うた」の結びつきといえば、松川冤罪事件における被告救援運動が詩を書くことによつて広がつていった事例を想起することができるが¹¹⁾、今回の場合は作曲・合唱との結合が目指されていることと、松川のように被告救援運動それ自体が詩作を呼びかけたように原水爆禁止運動が詩作作曲を呼びかけたのではなく、うたごえ運動が独自の構想からこれを提起したという点が異なっている。それゆえ両者の相乗効果がこの時期の運動の際立った局面を示しているのである。

さて、木下航二が若竹青年会の場で浅田石二に詩を書くことを依頼したのはセンターの呼びかけから間もなくのことであつた¹²⁾。「六月下旬のある日曜日の夕方」に木下は浅田から三篇の詩を受け取つた。そこから一つを選び、作曲したのが今日に伝わる「原爆を許すまじ」である。次節で見るように、作曲上歌いにくいところを木下が改作している。この作品を木下は七月二十日の締め切りぎりぎりに音楽センターに提出したという。

2. 「原爆を許すまじ」の作詩

この歌を作詩した当時、一九三一年生まれの浅田石二青年は二三歳、町工場で電球製造に携わる労働者であった。彼は詩作の過程を次のように回想している。

「仕事中の朝方でした。僕は一番をやつと作りしました。忘れないように十回も二十回もくり返し頭に叩込みました。それからあとをつくるのに何日かかかり、四番の詩はとくにあなたのむつかしいという批判もあり何回か作りなおし、作曲された後までかゝつていました」⁽¹³⁾

おそらく仕事場で詩が浮かんだのであろう。仕事のさなかであるからメモをとることができない。「忘れないように十回も二十回もくり返し頭に叩込」んだのはそのためである。四番は作曲が終わつてからもいじつていたというからかなり苦心したことがわかる。

浅田が作詩した「原爆を許すまじ」原詩は次のようなものである。⁽¹⁴⁾

一、祖国の街やかれ殺された

みよりのほね埋めしやけつちに

いまは白い花咲く

みたび許すまじ

呪う原爆われらの街に

二、祖国の海荒れてふりそそぐ

くろい雨喜びの日々はなく

いまはふねに人もなし

ああ 許すまじ

呪う原爆われらの海に

三、祖国の空重く奪われて

太陽、殺リクの炎、煙

きょうまた天おおお「う」

みたび許すまじ

呪う原爆われらの空に

四、はらからのながき歴史たえまなき

労働にきづきあぐとみと幸

人もみな死に絶えん

ああ許すまじ

呪う原爆世界の空に

現行版と大きく異なるのは、それぞれ一行目の最後の一節（五文字）をカットしたこと、最後の行の「呪う」を外したこと、二番・四番にある「ああ許すまじ」と一番・三番にある「みたび許すまじ」を組み合わせてリフレインとしたこと、「ああ許すまじ」のあと原爆「を」と語調が整えられていること、「祖国」を「ふるさと」に置き換えたこと、などである。三行目もすべて「今は」から始まる形に統一されている。そういう意味では、原型を保つてはいるものの「原詩に大幅に手を入れるという暴挙」と木下本人が述べているのは間違つてはいない。⁽¹⁵⁾

曲に合わせて四番を調整したというのは、おそらく三行目の「いまはすべてついえさらん」という箇所であろう。ここは原詩と比べてメロディと歌詩がうまくかみ合っている。とはいえ、浅田はしばらくの間この歌を完成した形態で聞くとはなかつたようだ。彼は思いもよらぬ形でこの歌の完成形に出

会うことになる。

3. 発表と普及

歌が最初に公表されたのは七月二十八日の音楽センター定期演奏会「平和歌曲の夕べ」においてである。指揮者は林光、伴奏者は萩原希史夫、中央合唱団が歌い、歌唱指導も行われた。木下はこのときは立ち会っていないと回想している⁽¹⁶⁾。三日後の三一日に芝公会堂で行なわれた「京浜のうたごえ」では、木下も自ら作曲した「煙突の下で」と「青春を守ろう」（荒井敬亮作詩）⁽¹⁷⁾の指揮をとっているが、「原爆を許すまじ」は演奏されていない。木下は「ともかくよびかけに応じて原水爆反対の気持ちを歌にできたことに満足して、しばらくはこの歌のことを忘れていた」という⁽¹⁸⁾。

浅田もまた当時それどころではなかった。江島寛が紫斑病に倒れ、救援に走り回らなければならなかったからである⁽¹⁹⁾。身辺多忙な中、浅田はその年の八月六日に広島市で行なわれる第一回「国鉄のうたごえ」祭典（国鉄合唱サークル全国協議会）に東京南部を代表して行かないかという誘いを受ける。「国鉄品川や大井から南部の近隣サークルにもよびかけがあり、文学集団から浅田石二さん、若竹会からは加藤武昭君が参加することになった」と木下は回想している⁽²⁰⁾。ここではサークルのつながりの中の参加呼びかけにすぎず、「原爆を許すまじ」の作詩者としてではないことが重要である。いずれも木下が当時活動をともにしていた青年であり、木下の推薦があったのではないかと推測されるが、木下自身は参加していない。

作詩者も作曲者もその後には歌がどのような運命をたどるかについて予想だにせず、国鉄のうたごえは開かれた。「原爆を許すまじ」がその後爆発的に全国に広がる起点となったのはこの集会であった。広島では国鉄合唱サークル全国協議会結成大会と大音楽会とが行なわれたが、この祭典へは「国鉄の仲間だけではなく、外部のサークルの仲間も多く参加」したという⁽²¹⁾。浅田たちの参加もまた、この祭典が開かれた催しであったことよって可能となったのだ⁽²²⁾。祭典でこの歌が歌われたかどうかははっきりしないが、日野三朗によれば、祭典のあとの宿舎でこの歌が爆発的に歌われる一夜があったという。その一夜が「原爆を許すまじ」を全国に広める発火点となった。

「広島で、原爆記念平和式典に全員が参加し、そのあと全国協議会結成大会と大音楽会——感動的なうたごえの大交流会が、全国から五百名の参加で盛大に開かれたのです。感動と興奮の中で終了し、そのまま国鉄集会所の宿舎に全員が投宿した時、この「原爆許すまじ」のうたごえが湧き起こったのです。／みんな興奮してほとんど寝なかつたと思います。燃え尽きた広島に今、自分がいると思うだけで、じっとしてられない、何かしなければいけないという共通の感情が皆の中にあつたのです。それがこのうたで爆発したのです。／東京から参加したどのサークルに属していたか分らなかつたが、女性の一人が、このうたの指導に当たっていました。すべての室から、うたの指導の申し込みがありました。指導しきれないので、覚えた仲間、知らない仲間の室へ指導に行くと、まさか燃えるような勢いで伝わり、幾たびとなくうたわ

れました。／＼翌日、全員が宮島の観光に出かけました。船を占領した参加者は、そこに勤務する国鉄船舶の仲間とうたい交わしました。全国の仲間は、この「原爆許すまじ」のうたを最大のおみやげにして、全国に散りました。そして祭典の感動を、このうたに託して報告会でうたいまくったのです。」⁽²³⁾

そして帰りの列車ではこの歌が高らかに歌われた。作詩者の浅田はここで初めてこの歌に出会う。

「帰り道、東京に向けて走る夜行列車の中で仲間と話合っていた耳に、聞いたことのあるような“詩句”のはいつた歌声が聞こえてきた。楽譜を見せてもらおうと、それは間違ひなく木下航二作曲となつている。これが、わたしの初めて聞いた、あの“うた”であつた。」⁽²⁴⁾

木下は浅田のこの報告を受けて歌の行方を知る。ところがこのいささか呑気な作詩者・作曲者をさしおいて、歌は国労（国鉄）の全国ネットワーク（鉄道網）に乗つてまたたく間に広がつていったのだつた。五四年の夏はビキニ事件以後の原水爆禁止署名運動の盛り上がりさなかにあり、「原爆を許すまじ」はこの運動に情動を組織する力を与えた。うたごえの運動と原水爆禁止運動は相乗的に高揚と拡大を見せる。とくにうたごえ運動にとつてこの状況は大いにプラスになつたことと考えられる⁽²⁵⁾。同年十一月に行なわれた第二回日本のうたごえ祭典のタイトルは「日本のうたごえ・原爆を許すまじ」。この歌が運動全体を表象する力を持つに至つていたことを示している。

4. 南部作詩作曲の会と京浜絵の会

この短期間の爆発的な広がりにとまどいながらも、木下と浅田はうたごえ運動への関わりを深めていく。一〇月には東京南部における創作歌運動の結集点たる「南部作詩作曲の会」を結成した。ここには「作詩部」と「作曲部」があり、作詩部には井之川巨（志賀智之・望月新三郎（石川はじめ）など南部文化集団の主要メンバーも積極的に関わつてゐる。作曲部は音楽センターの音楽家たちが大きな比重を占めていた⁽²⁶⁾。

作詩作曲の会は毎月のように研究会や合評会をひらき、機関誌『南部のうた』を二号まで発行するが、早くも五五年いっばいで活動を停止してしまふ。メンバーの多忙化や創作の困難、六全協シヨックなどが複合してのものと思われるが、同じ都内での音楽センター中心の作詩作曲運動は五六年からも継続されているため、途絶したものとは規定することはできない。作曲の中心を占める音楽センターの人々がセンターを軸に活動の場を移していくことなども考える必要があるだろう。木下と浅田はその後も原水爆禁止運動と関わりながら東江南部での歌唱指導の活動に献身的に関わつてゐる⁽²⁷⁾。

他方、作詩作曲の会が生まれたころ、南部文化集団に新たに加わつた仙田茂治・城戸昇はスケッチや版画を軸とした美術の活動、「京浜絵の会」を結成（五五年二月）、五月と八月に『版画集』を発行した。

「絵の会」と南部文化集団は共同で同年八月の原水爆禁止世界大会に南部代表を派遣するためのカンパ活動として、『版画集』から四枚の版画を選んだ「生活版画集」を七月八日の原水爆禁止

世界大会東京集会で販売した。四枚の版画の中には原爆をモチーフにしたものは一枚もないが、東京南部の労働者生活を描いた版画を売ることでカンパを集め、広島に代表を送るという運動のスタイルは、この時期のサークル文化運動の一つのあり方を示している。

この絵の会の活動も五五年中には停止してしまいが、主なメンバーは南部文化集団が地域展開する中で出会った人々であり、人が集まることで新たな活動分野が開け、当初の詩と文芸中心であった活動が多様化・広域化した点では運動の路線として一定の成功を収めたものと考えられるだろう。

三、五四・五年の文化・社会運動

1. サークル運動のピークとしての五四・五五年

先に見たように、一九五四年から五五年という年は下からの自発的運動としての原水爆禁止運動が空前の盛り上がりを見せた時期であるとともに、うたごえ運動の全国的な高揚にとどまらず、文化サークル運動が最も活性化した時期であるといえる。一九五五年七月に結成された国民文化会議は総評（日本労働組合総評議会）をバックとして文化サークル運動のナショナルセンターをめぐらしたものであった。同じころ、労組の大単産レベルでの全国協議会作りも進んでいた。⁽²⁸⁾

この時期のうたごえ運動は、労組の活動家や文学サークル員などを巻き込んだ分野横断的な高揚を示しており、サークル運動全体の高揚を支える機能を果たしていたものと推測される。六〇年代に入るとうたごえはサークル運動の一「ジャンル」に縮小し、

分野横断性を喪失していくことになる。この時期以後、サークル文化運動は大勢としては衰退局面に転じていくが、総じて六〇年ごろまでは持ちこたえている。六〇年安保ではサークルの活動家も地域安保共闘に動員され、また六〇年代初頭以降の総評・社会党と共産党の路線対立の中で、原水禁運動や女性運動ばかりでなくうたごえ運動も分裂を経験していく。五〇年代のような横断性はもはや期待できない状況になっていくのである。⁽²⁹⁾

2. サークル運動の組織化をめぐる——「われらのうたの会」の比較

以上に見たような東京南部と全国の動向をもとに、広島を代表するサークル「われらのうたの会」（第二次、以下、「うたの会」との比較を試みてみたい。

「うたの会」の動きを見てみると、第一次の「われらの詩の会」⁽³⁰⁾から「うたの会」への転換にあたっていくつかの重要な方針転換があったことがわかる。第一次の「詩の会」は、五三年三月の峠三吉の死のあと求心力を失って解散状態に陥り、あらためて「うたの会」として再発足した。増岡敏和の整理によれば、①うたごえ運動との提携、とくに「作詩作曲運動」との提携、②自らのサークルの巨大化（支部増設）ではなく、個々の独自活動への「援助」という工作方針、③サークル交流の場の設置の三点の特徴をもっていった。⁽³¹⁾ ②はとくに「詩の会」のときには「支部」の建設を目的意識的に追求していた時期があり、この路線からの転換を示している。

こうした①③の方向性は、いずれも南部文化集団が採用した

方針と並行性を持つている。ただし、南部文化集団においては②が先で（一九五三年一〇月）、①が最後に来る（一九五四年春）という点で順序に違いがあるが、作詩作曲運動との提携とサークルの水平的な組織化という方針には明らかな共通性があり、両者を結ぶ「環」が何であったのかは今後探究されなければならない⁽³²⁾。

この転換は、広島で戦後長きにわたって原水爆禁止運動で大きな役割を果たしてきた松江澄が平和運動のサイクルに関して語っている「前史」と「後史」の区別とも関連している。松江によれば、五四年以降の原水爆禁止（署名）運動以前の運動は「共産」党を中心にした戦闘的で前衛的な反帝平和の闘争であったのに対し、署名運動以後は大衆運動としてまったく異なる質のものになつており、そこには「歴史的な断絶がある」というのである⁽³³⁾。大衆的なサークル運動が盛り上がりつついくということも、サークル運動のスタイル自体が先鋭的な分子による「半非合法」なものから大衆的な形へと変えていくことも、ともにこの時期の転換とつながるものである。高島通敏は、この時期から六〇年安保闘争にかけて盛り上がりつついく大衆的な政治運動を「革新国民運動」と呼んだ⁽³⁴⁾。この「革新国民運動」のサイクルとサークル運動のサイクルとの重なりあいとずれとを今後明らかにしていく必要がある。

3. ピークから衰退へ

この一九五四年から五五年の盛り上がりも、先に見たように京南部では早くも五六年には下火になつてしまつている。「地域」へと入り、サークル懇談会の組織化に力を注ぎ、多数のサークル

のかけもちをしながら横へつないでいく活動も、五六年には放棄されるに至る。南部文化集団は長い会議の果てにこうした多面的な活動を清算し、「南部文学集団」と再度改称して文学同人集団へと転換していく。「うた」や「絵」の運動で出会つた仲間も、多くは文学活動への転身を受け入れた。その結果、『突堤』と題された機関誌は五六年から五九年までの間に一三号を発行し、集団は比較的安定した活動の時期を迎えた。

広島島の「うたの会」の中心人物の一人であつた増岡敏和は五六年四月に東京へと転出し、赤木健介のもとで『詩運動』編集に携わるようになる。「うたの会」はその後も六三年まで活動を続けるが、サークル誌を介して運動が地域横断的にネットワークされていくという五〇年代の高揚はもはやなかつたものと思われる。

五〇年代サークル運動の極点は五五年にあり、その中心に存在していたのが「うたごえ」運動であつた。同じタイミングで国民文化会議がスタートするが、準備過程で高野実は関鑑子に対し協力を求めていた。この蜜月は六〇年安保闘争まで続くが、安保闘争はサークル活動家を街頭に動員（地域安保共闘）し、五五年を生き延びたサークル活動家たちも急速に疲弊していくことになる。

また、大単産の全国ネットを基盤に中小の文化運動・サークルを結合しようとした文化会議の構想は、安保の頃にはその基盤を失いつつあつた。谷川雁の「全国サークル交流誌」の挫折も個人をめぐる政治情勢ばかりでなく、全国的なサークル運動の衰退という問題を抜きには考えられない（もつとも、雁の提起自体、すでに衰退しつつあるサークル運動に対する一つの「介入」であつたと

すれば、それは予想外のことというより「賭け」に敗れたものとして考えられよう。³⁵⁾

「安保」のあとには、版画を彫り、うたを歌い、詩を書きフォークダンスを踊る文化が急速に「ダサイ」ものと化して揶揄の対象になっていく。この転換は何だったのか。そのことはサークル文化運動を歴史的に理解するだけでなく、第二次大戦後の日本社会における文化的ヘゲモニーをめぐる根本的な問題に触れる問題である。この点につき、合同研究会に参加された皆さんとともに今度とも議論を深めていければと考える。

注

- 1 この点については、詳しくは城戸昇『東京南部・戦後サークル運動の記録Ⅰ 詩と状況・激動の五〇年代』（文学同人眼の会、一九九二年）、および拙稿「下丸子文化集団とその時代——一九五〇年代東京南部サークル運動研究序説」「現代思想」二〇〇七年二月臨時増刊号「戦後民衆精神史」、拙稿「解説 無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」「東京南部サークル雑誌集成」解説・解題・回想・総目次・総索引』（不二出版、二〇〇九年）を参照。
- 2 詳しくは注1の文献、および鳥羽耕史『運動体・安部公房』（二葉社、二〇〇六年）を参照。
- 3 浅田石二「下丸子の詩人たち」、『東京南部サークル雑誌集成』解説・解題・回想・総目次・総索引』（不二出版、二〇〇九年）および前掲拙稿を参照。『詩集 下丸子』は『東京南部サークル雑誌集成』（不二出版、二〇〇九年）第一巻所収。『詩集 下丸子』第一

集表紙の版画（桂川による）には「ベルリン平和祭参加」と記されているが、これはベルリンで同年八月に行われた世界青年学生平和友好祭への参加を目したものであり、安部たちはこれをもってベルリンへ実際に行こうとしたが叶わなかった（鳥羽前掲書、二五頁）。ちなみに峠三吉のガリ版刷り『原爆詩集』初版（新日本文学会広島支部・われらの詩の会、一九五一年九月）もまた、「一九五一年八月六日の平和大会と、ベルリンの世界青年学生平和友好祭に捧げられた」という（増岡敏和『原爆詩人 峠三吉』新日本新書、一九八五年）。奥付が九月となっていることから、八月に行われた同祭には間に合わなかったものと考えられるが、あとから「捧げられた」ということであろうか。且原純夫の編集による『にんげんをかえせ——峠三吉全詩集』（風土社、一九七〇年）所収の年表でも、「ベルリン世界青年学生平和友好祭参加作品として、ベルリンに送る」と書かれている（四七三ページ）。

- 4 本稿で紹介する東京南部のサークル誌は、いずれも『東京南部サークル雑誌集成』（全三巻十別巻）、不二出版、二〇〇九年）所収。
- 5 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第二四集、一九五一年。
- 6 以下、本節の記述は藤木洋『うたは闘いととも——うたごえの歩み』（音楽センター、一九八〇年）、村山輝吉「うたごえ運動はどう発展してきたか」（『知性』一九五六年四月増刊号「日本のうたごえ」）および城戸昇「東京南部うたごえ年表」（道場親信補正・短縮、制作年不明）に基づく。炭鉱におけるうたごえ運動の展開については水溜真由美「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」（『北海道大学文学研究科紀要』第一二六号、二〇〇八年一月）を参照。

7 詳しくは山岸一章「レッド・ページの証言」霜多正次編『ドキュ

メント昭和五十年史⁵ 占領下の日本』（汐文社、一九七四年）、お

よび川上允編『民族独立行動隊の歌』誕生物語——天空三二二メー

トルの労働者詩人山岸一章アルバム』本の泉社、二〇〇八年を参照。

五〇年代の多様な社会運動の場で歌われたことについては拙稿『倉

庫の精神史² 上野英信『親と子の夜』その²』（『未来』第四七二

号、二〇〇六年一月）、および「軍事化・抵抗・ナシヨナリズム——
砂川闘争五〇年から考える」（『現代の理論』第六号、二〇〇六年一
月）を参照。

8 「民族独立行動隊の歌」は六〇年安保の頃まで愛唱されたもよう

である。加納実紀「苦い（独立）（女たちの現在を問う会編『銃後
史ノート戦後篇²（日本独立）と女たち』インパクト出版会、一

九八七年）参照。

9 「交わされた手紙」『南部文学通信』第八号、八ページ。

10 この点については文献は多数あるが、さしあたって拙著『占領と
平和——（戦後）という経験』（青土社、二〇〇五年）を参照され
たい。

11 前掲拙稿「無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」

および松川運動史編纂委員会編『松川運動全史』（労働旬報社、一
九六五年）を参照。

12 以下、この歌が生まれる経緯については浅田石二「うた」をつ
くるまで」、木下航二「東京南部の片すみから」（ともに木下編『原
爆を許すまじ——世界の空へ』あゆみ出版、一九八五年所収）を参
照。

13 浅田石二・木下航二「原爆許すまじ」作詩者と作曲者の手紙交換

（『南部文学通信』第九号、一九五四年一〇月）一六ページ。

14 浅田前掲論文、三三ページ。ちなみに現行版は次のような詩にな
っている。

一、ふるさとの街やかれ

身よりの骨うめし焼土に

今は白い花咲く

ああ許すまじ原爆を 三度許すまじ原爆を

われらの街に

二、ふるさとの海荒れて

黒き雨喜びの日はなく

今は舟に人もなし

ああ許すまじ原爆を 三度許すまじ原爆を

われらの海に

三、ふるさとの空重く

黒き雲今日も大地おおい

今は空に陽もささず

ああ許すまじ原爆を 三度許すまじ原爆を

われらの空に

四、はらからのたえまなき

労働にきずきあぐ富と幸

今はすべてついえ去らん

ああ許すまじ原爆を 三度許すまじ原爆を

世界の上に

15 浅田・木下前掲「作詩者と作曲者の手紙交換」一七ページ。

16 木下前掲「東京南部の片すみから」四二ページ。

17 荒井も若竹青年会のメンバーであった(同、四一ページ)。
18 同、四二ページ。

19 浅田前掲「うた」をつくるまで」三四ページ。

20 木下前掲「東京南部の片すみから」四二、四三ページ。

21 日野三朗「歌が広まる時」(木下編前掲書)五八ページ。

22 藤本洋によれば、「職場サークルが集まってひらく産業別のうた」ごえ祭典とその協議会が全国的規模で結成されたのは、この第一回国鉄のうた「ごえ」がその最初で、炭鉱のうた「ごえ」や紙パ・金属・私鉄などがこのあとにつづ「いた」という(藤本「広島で開かれた「国鉄のうた」ごえ」木下編前掲書、五四ページ)。

23 日野前掲、五八、五九ページ。この「原爆を許すまじ」の歌が当時広島現地でもどのように受けとめられたのかという点について、国鉄のサークル活動家で広島地方文学サークル協議会に参加しわれらの詩の会にも加わった村中好穂の回想が残されている。サンフランシスコ講和条約以前の情報統制、「ひどいめにあったのは被爆者だけではない」といった反発などにさらされた経験をふまえることなしに、歌がどのように受け止められたのかを考えることはできない、と村中は語っている。翌年の原水爆禁止世界大会では、多くの被爆者もこの歌に唱和したが、五四年当時はある「戸惑い」があった、というのである。

「一九五四年、ピキニ水爆実験を契機に原水爆禁止運動は急速に広がりが高まる。その中で「広島のうた」ごえは生まれ大きくなっていき、八月八日、爆心地の本川小学校講堂で原水爆禁止のスローガンのもとに第一回広島のうた「ごえ」を開いたのである。原水爆禁止を公然とかかげながら、その時「原爆を許すまじ」の歌がどのように位

置づけられていたかは残念ながらはつきりした記憶がない。何人かの人に聞いてみたが同様であった。／個人個人の思いはいろいろあるだろうが、共通していたのは次の二つではなかったかと私は思う。

原爆のことをわかかってほしいと思いつけてきたのが今やつとかなえられつつある証として「原爆を許すまじ」の歌があるという喜び、これまで歯をくいしばるようになってがんばってきた毎日に、少し毛色の変った都会風の継木がされたような戸惑い、そんな微妙な気分の中で、「ああ許すまじ原爆を」と歌うことにテレがあつたのは事実である。(村中好穂「原爆を許すまじ」とヒロシマ」(木下編前掲書)八八、八九ページ)

また、浅田石二の回想によれば、数年後、増岡敏和の紹介で峠和子・山代巴と会った際、山代から「ありがとう」と言われたという(浅田石二氏へのインタビューによる「二〇〇九年九月一七日」)。

24 浅田前掲論文、三四ページ。

25 音楽センターは個人としての作詩者・作曲者より運動組織者としての自分たちがこれを活用・普及する主体と考えていたようである。各地で行なわれた集会や祭典、催し物の連絡は作り手たちにはほとんど伝えられることなく、音楽センターは独自に運動を展開していた。浅田石二はのちにそのことについて音楽センターに抗議をするが、センター側が取り合わなかったため、彼は「うたごえ」運動から離脱する(浅田「映画『きちがい部落』讀』『突堤』第二二号、南部文学集団、一九五八年四月)。

26 城戸昇「東京南部うたごえ年表」によれば、本部は木下航二方に置かれていた。作詩部と作曲部のメンバーについて、詳しくは浜賀知彦「解題『南部のうた』」(『東京南部サークル雑誌集成』解説・

解題・回想・総目次・総索引」を参照。

- 27 アサヒグラフ編集部「ある裏街の集い——原水爆禁止の運動はじまる」(『アサヒグラフ』一九五六年六月一七日号)では、アコードオンと幻灯を持って工場街を回る二人の姿が報じられている。
- 28 河出書房から発行されていた総合誌『知性』では、五五年一月月号をはじめ幾度かサークル運動の特集をしている。城戸昇『東京南部戦後サークル運動史年表——敗戦から60年安保まで』(文学同人・眼の会、一九九二年)での新規サークル誌創刊を集計すると、一九五四年から五五年がサークル誌創刊のピークを示している(前掲拙稿「無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」二九ページ)。
- 29 「分裂」の背景としては、原水禁運動の路線問題、労働戦線における「四・一七スト」問題などが大きな影響を持った。この点については山部芳秀「国民文化会議の四十年」(国民文化会議編『国民文化会議45年の経過報告書/資料・解説』国民文化会議、二〇〇一年)参照。
- 30 われらの詩の会については、本号所収の水島裕雅論文を参照されたい。
- 31 増岡敏和「文学サークルの一つの方向——広島「われらの詩の会」「われらのうたの会」の経験から」(『文学評論』一一号、一九五五年一〇月)一一〇ページ。
- 32 共産党の文化運動方針が背景に存在するであろうことは推測できることだが、浅田石二によれば、『詩運動』の全国詩活動者会議での経験交流が大きかったのではないかと語っている(前掲浅田氏へのインタビューによる)。
- 33 松江澄『ヒロシマから』(青弓社、一九八四年)一六九ページ。
- 34 高昌通敏「大衆運動の多様化と変質」(日本政治学会編『年報政治学一九七七—五五年体制の形成と崩壊 続・現代日本の政治過程』岩波書店、一九七九年)参照。
- 35 この点については前掲拙稿「下丸子文化集団とその時代」参照。

※本稿は二〇〇九年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「一九五〇年代地域サークル文化運動の歴史社会学的研究」による研究成果である。